

## 新詩のテキストと享受方式

——長詩「北遊」の場合

佐藤 普美子

### はじめに

前田愛（一九三二〜一九八七）は、その代表的な著書『近代読者の成立』（有精堂、一九七三年一月）の中で、活字メディアの台頭による黙読習慣の浸透が「近代読者の成立」を促したことを指摘している。さらに明治期の新聞ジャーナリズムの役割について次のように述べている。

小説を音読しながら言葉の響きやリズムを楽しむ習慣、他人が小説を朗読する声に耳を傾ける受動的な享受方式はしだいに廃れて行き、黙読による孤独で内面的な享受が一般的になるのである。このような転回を近代読者の誕生と名づけるならば、その予備状況をつくりだした要因のひとつに、毎日一定量の活字を消化する習慣を大衆的なレベルにまで普及させた新聞ジャーナリズムの役割が考えられ

新詩のテキストと享受方式

ていい。（もう一つの『小説神髓』——視覚的世界の成立——）

これは日本近代文学についての指摘であるが、中国一九二〇年代に発展した新聞雑誌ジャーナリズムにおける「近代読者の成立」を考える上でも有効な視角を提供している。またここでは小説にのみ言及するが、詩歌の場合も基本的な事情はそれほど変わらないのではないだろうか。もちろん韻文である以上、音読習慣から容易に抜け出せないとしても、活字メディアの台頭はやはり小説と同様、詩歌の享受方式を「音読」から「黙読」による孤独で内面的なものに転回させる契機になったと考えてよい。

周知のように、五四時期以降の各種新聞の「副刊」は新文学、新思想を発信・喧伝する陣地であったが、この新聞ジャーナリズムの普及が、新文学なかでも新詩の享受方式および詩的

言語に新たな転回をもたらしたことはもつと考察されるべきだろう。さらに、ジュネットが指摘するように、文学作品の閲読・享受方式を決定するのは必ずしもテキスト本体の言語内容ばかりではない。掲載媒体やそのフォーマットをはじめ、パラテキスト（狭義の本文に対する書物の構成部分。主として、書物の本体の前に来る題目、献辞、序文を指す）によるところも大きく、それらが作者や読者それぞれの意識や両者の関係に転換をもたらすことを視野に入れなければならない。

前田愛は先の著書の「あとがき」の中で、読者層の実態を浮かび上がらせる位相として、①作者の対読者意識、②出版機構の構造、③読者の享受相の三つを挙げている。小文では一九二〇年代末の『華北日報・副刊』に連載された、馮至の長詩「北遊」（全十三章）を、それまでの詩歌の閲読方式にある転換をもたらした事象の一つとしてとらえ、単行本形態の時とは異なる「作者の対読者意識」（前出①）に若干の考察を加えるものである。あわせて新聞連載の新詩が読者の享受方式に及ぼす影響についても、ある可能性を提起してみたい。

## 一 「北遊」の連載方式とパラテキスト

馮至の五百数十行、全十三章からなる長篇抒情詩「北遊」

は、初め「鳥影」の筆名で『華北日報・副刊』（一九二九年一月六日～一七日）に連載された。<sup>①</sup>ところが同年、単行本詩集『北遊及其他』（一九二九年八月）「第二輯」（全三輯）に収められる際、なぜか第五章「雨」が脱漏し、<sup>②</sup>全十二章となった。八十年代に入つて、ある研究者の初出誌調査により、同章が「発掘」され、『馮至選集』（一九八五年）と『馮至全集』（一九九九年）に同詩が収められる際には、第五章が「復活」して、初出通りの全十三章となった。このように「北遊」は、まず①二〇年代の初出テキストと単行本テキストで章数が異なり、さらに②五〇年代、八〇年代の各種選集や九〇年代全集本テキストの特に最終章の字句は、二〇年代のテキストとは大きく異なっている。これについて簡単にいえば、初出しる単行本にしる二〇年代のテキストには当時の作者の閉塞した憂鬱な気分が色濃く反映しているのに対し、五〇年代以降のテキストでは、最終章最終四行は、「我不能……」と自らが悲観的気分<sup>③</sup>に陥るのを制止するような意志的な表現に、作者自身によつて書き換えられているのである。

もちろんこうした現代文学の各種版本の異同は、特に一字の重みが大い詩歌のテキストにあつては重要な問題をほらむと思われるが、ここで小文が問題にしたいのは実は言語内容とし

てのテキストの異同ではない。『華北日報・副刊』に連載された「北遊」の初出形態（A）と、同年新たに序文とエピソード（いわゆる「パラテキスト」）を賦与され出版された単行本詩集（B）の形態とでは、読者の享受方式にどのような相違をもたらすかという点である。

さらに両者の閲読に関わる最も大きな違いとしては、初出（A）は全十三章が十二日間にわたって順次読者に提供されるという「連載」方式をとったことであり、留意されなければならぬ。なぜなら、この提供方式により読者の一篇の詩の閲読及び享受に要する時間は否応なく中断され、引き延ばされたからである。次に、書物の形態を持つ単行本詩集（B）にはいわゆるパラテキストとして「北遊」成立の背景を語る「序」文（一九二九年五月九日）と主題を補強するエピソードが新たに附されたことも注目に値する。こうしたテキストの提供方式の違いが読者の享受と受容に何らかの影響を及ぼすことは十分に考えられる。

## 二 「連載」という方式

新聞の「連載」小説は珍しくない。評論でも（上）（下）など何回かに分けて載せることもよくある。紙幅の限られた誌面

に、分量的に長いものは一度に載せられないという物理的制約がまずあるからだが、その場合でも一回ごとに独立性を保つことが分載の条件になる。

「北遊」のような長篇抒情詩が連載されるのは異例のことである。紀行詩のようにあらかじめ個別性・独立性が明確なものは別にして、通常どんなに長い詩でも、すでに完成された一篇の詩であるかぎり（馮至によれば「北遊」は一九二八年一月初めの数日間で書きあげたものである）、<sup>(4)</sup> 分断されて読者に提供される方式はほとんどないし、そもそも普通はそのような方式を作者自身が望まないであろう。

連載された事情に紙幅の問題があるにせよ、少なくとも「連載」方式に作者自身の意志（積極的であれ消極的であれ）と対読者意識が反映されていると考えるのは自然なことである。

さて詩歌において、このような一回で一気に完結する鑑賞を可能にせず、読後の感想や印象をあえて「先送りする」、または「引き延ばす」方式がもたらす効果とは何か。ここで想定されるのは、読者に一回ごとの部分の印象を残像として積み重ねさせながら、各章の展開のプロセスを意識させ、ゆっくりと一篇の詩を鑑賞させることである。すなわち否応なく読者自身に時間をかけて部分と全体を関連づけ統合させることを促すこと

になる。小説ほどではないにしろ、次章（未知の展開）への読者の期待を引きだす効果もあるだろう。

こうした「部分の独立性」と「全体の統合性」への意識は、実は馮至のデビュー作である「帰郷（組詩十六首）」に顕著に現れている。『創造季刊』第二巻第一号（一九二三年五月）に掲載された同組詩のうち第三首「一顆明珠」、第十二首「不能容忍了」、第十四首「夜深了」は、後に馮至の第一詩集『昨日之歌』（一九二七年）にそれぞれ独立した一篇として収録されている。また「冬天的入」（『沈鐘』半月刊第十二期、一九二七年一月二六日）は全七十二行十八連、全九章から構成される長詩であるが、その中の第六章（第九連）第十二連）だけは、その後「雪中」として独立し、第二詩集『北遊及其他』（一九二九年）に収められている。

馮至にとって、全体は必ずしも部分に優越するものではなく、またその逆でもない。個々の詩篇は独立してはいるが、閉じられて完結した世界ではなく、各篇が大きなテーマの下に相互に関連性を持つのである。長詩「北遊」のように「遍歴」「漂泊」という大きなテーマの下で、文明批評的まなざしが捉えた都市の景観と「生成する主体」（主体形成のプロセス）を表現するのに、連載方式は読者に鑑賞の引き延ばしを要求し、

一回性のセンチメンタルな詠嘆に安易に流れることを阻止するための、新しいストラテジーになりえたとは考えられないだろうか。

因みに、馮至は「北遊」を執筆した年のほぼ同時期に、ハイネの散文と詩から構成される「ハルツ游記」（『哈爾茨山游記』上海北新書局、一九二八年三月）を翻訳しているが、この事実も精神の遍歴を主題とする長詩執筆への関心とそれに対する十分な用意があつたことを示唆するものであろう。

### 三. パラテキストの機能——意図と主題の提示

先へのべたように、「作品」を構成するのは、いわゆる本文（狭義のテキスト）だけではない。テキストの周縁にあつて、外部との境界をつくる部分があり、それをジュネットは「パラテキスト」と呼んでいる<sup>(5)</sup>。繰り返しになるが、さらに具体的にいえば、作者名、タイトル（及びサブタイトル、章題）、献辞、エピソード、序文、まえがき、注、あとがき等が含まれる。書物という形態になれば、表紙や挿絵、写真、またいわゆる「帯」の紹介文・推薦文のコピー等も含まれる。

例えば、副刊に連載された「北遊」（A）の作者名「鳥影」（馮至の筆名）は、単行本（B）では「馮至」に変わる。また

本文は一冊の書物の中の「第二輯」として一定の分量を占め、当然、表紙（永瀬義郎の木版画「沈鐘」）などの装丁が加わる。さらに活字は、副刊（A）の「縦組み」から（B）では「横組み」に変わったことも、本文テキストの印象形成に大きく作用している。このようにテキストの言語内容だけではなく、掲載物（額のような絵画でいう「支持体」）はじめフォーマットが広義のテキストの受容に関わっていることはもつと注意されてよいだろう。

特に、テキスト「北遊」の読みに少なからぬ影響を及ぼしているのは、初出の本文テキストにはないパラテキストとしての「序文」と新たに一つ加わったエピグラフである。詩集『北遊及其他』「序」（初出は『華北日報・副刊』第六十八号、一九二九年五月一三日）では、作者の実生活における事情や創作時の社会背景が作者自身によって語られているため、読者は作者の「創作意図」を知らされる（打ち明けられる）。単行本に付加された、こうした「序」の内容は、読者の「北遊」閲読のための解釈的機能を果たすことになる。と同時に、作者の自己解説を読者が暗黙のうちに受容するための一種の契約にも似た役割を果たしていると考えられる。

そもそもその性格上、主題を要約していると考えられる「北

遊」のエピグラフ（題句）は二種ある。一つは初出「北遊」（A）本文の表題の次に引用されている杜甫の詩句一聯で、それが単行本『北遊及其他』（B）では、第二輯（北遊）の扉詩として引かれている。もう一つは、（A）にはなく、単行本（B）で本文タイトルの下に引かれたオランダの作家ファン・エーデンの童話詩『少年ヨハネス』の一節である。これは単行本で初めて附されて以来、いずれのテキストにも含まれる「北遊」のエピグラフとなった。

『少年ヨハネス』は一九二八年一月、魯迅訳で未名叢刊の一つとして出版された童話詩である。「人間精神の遍歴が象徴的に語られた」（魯迅『『小約翰（少年ヨハネス）』引言』<sup>(7)</sup>）というこの童話詩の最後の一節——「彼は身を切る夜風に逆らい、あの大きな暗黒の都市すなわち人間とその苦痛の在り処へ向かう険しい道へ足を踏み入れた」という部分が引かれている。この言葉に「北遊」を貫く主題があると作者自らが示唆しているわけ、すなわち人間社会が苦難に満ちた巨大な暗黒の世界であると認めながらも敢えてそこへ向かっていくことが人間の生であるとする認識を見ることがができる。進めば進むほど苦痛を増す道なのであると分かかっていてもなお「人間とその苦痛の在り処」である大都会に向かって足を踏み出していこうとする、不

安と苦痛の自覚に立つ人間存在についての認識である。これこそが「北遊」が到達した人間の生についての認識だと作者自身が表明しているのである。

また (A) (B) 共通のエピグラフである杜甫の詩句「此の身飲み罷みて帰する処なし 独り蒼茫に立ちて自ら詩を詠ず (此身飲罷無歸處 獨立蒼茫自詠詩)」の後句「独り蒼茫に立ちて自ら詩を詠ず」については従来二通りの解釈があるようだが、簡単にいえば、この中に杜甫の憂い落胆した気分を見るか、奮い立つ気概を見るかで対照的な解釈に分かれる。ただし馮至の意図は、先の『少年ヨハネス』の引用部や、単行本詩集序文の中の「自分はまだ前に進んではないけれども落ちぶれてもいない」という言葉と合わせて考えると、ここでは、周囲の荒涼たるさまを全身で痛切に感じ取りながらも敢えて毅然として立つ杜甫の気概を見ることにあると考えられる。こうして東西文学それぞれを用いたエピグラフは互いに補強し合い、読者に「主題」を意識させる。

すなわち二種のエピグラフは、明らかに「北遊」の創作意図を、本文テキストに「先立つて」提示する役割を果たし、読者に解読の鍵を与えるものとして有効に機能することになる。

#### 四、長篇抒情詩の新しい享受方式——新詩概念の転回

上記二節で、「北遊」の一九二〇年代の異なるテキスト二種——(A) 新聞副刊連載版と (B) 単行本所収版について、(A) の連載方式と両者のパラテキストの特色を見てきた。読者層について言えば、(A) は数の上では (B) を圧倒している。(A) で同詩を読む者は一九二〇年代に生きる「華北日報」の読者であり、同時にその日の政治経済社会のニュースも目にするだろうから、常に現実の出来事にリアリティを感じ、緊迫感と焦燥感に曝されている。もちろん彼らの文学的嗜好の有無は分からない。同詩が「連載」であっても皆が続けて読むとは限らないし、期待を持って読むとも限らない。読者層は厚いとしても、読者の受容のしかたは均質でなく、テキストの享受は不確定で不安定な読者層である。一方、それに対して (B) は発行部数が新聞よりはるかに少なく(自費出版でもある)、購買して求める層は基本的に文学(詩歌)愛好者に限られる。あるいは連載されたテキストの既読者かもしれない。また本文にパラテキストという付加情報があることから、読解と鑑賞の方向性はある程度誘導され、享受のしかたが想定される「安定した」読者層といえるだろう。

もちろんここでは新聞と単行本という両者の提供／閲読方式の優劣を問題にしているのではない。ただ、(A)のような、従来とは全く異なる、詩のテキストを「分割し伝達する」方式が、新詩の鑑賞と享受のスタイルを変え、一般読者の新詩の概念に転回を生じさせる契機になり、同時に〈内省する主体〉を創り出す言語として機能したかもしれないという仮説を提出するにとどめたい。

詩は意境を持つ完結（＝自足）した世界として短時間のうち鑑賞され、読者の一回性の感嘆や詠嘆を要求するものばかりではない。独立した部分と部分が関連しあい意味を創出しながら展開し（それは読者自身が個々の部分の諸関連を発見することもでもある）、一つの詩想が一人の読者の中で生成されていくような詩のあり方とその享受のスタイルが提示されたことは、それまでの詩の概念自体にゆさぶりをかけるものではなかったか。それは作者と見えない読者のコミュニケーションを新聞という大衆的媒体の中で実現しようとする試みの一例だとも考えられる。また一方で、それは馮至の詩作の初期段階からある、内省する言葉すなわち内省する孤独な主体を形成していく方法とも関連していたのであろう。また一九二〇年代中国における新聞の「副刊」が、新文学や新思想を発信する場であった

だけではなく、「新しい詩」を享受する「新しい読者」を形成する媒体として機能し、詩歌の概念そのものをゆさぶり、転回をもたらした可能性も考えられるのではないだろうか。

(注)

- (1) 「北遊」第一・二章は無題（ただ(一)(二)とある）  
『華北日報・副刊』第三号（一九二九・一・一六）。第三章「軍中」同副刊第四号（一九二九・一・一七）。第四章「哈爾濱」第五号（一九二九・一・一九）。第五章「雨」第六号（一九二九・一・二〇）。第六章「在公園」第七号（一九二九・一・二一）。第七章「Cafe」第八号（一九二九・一・二二）。第八章「中秋」第九号（一九二九・一・二三）。第九章「礼拝堂」第二〇号（一九二九・一・二四）。第十章「秋已經……」及び第十一章「Pumpkin」第十一号（一九二九・一・一六）。第十二章「追悼会」及び第十三章「雪五尺」第十二号（一九二九・一・一七）。
- (2) 拙稿「馮至の『北遊』未収の一章「雨」と筆名「鳥影」について」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第四号、一九八五年四月）参照。
- (3) 初出『華北日報・副刊』及び単行本詩集『北遊及其

他』所収テキストの最終章の最終八行は次の通り。

夜半我走上了一家小樓，

我訪問一個日本の歌女……

只因我忽然想起一茶：

「噢，這是我終老的住家嗎？雪五尺！」

這時的月輪像是瓦斯將滅，

朦朧朦朧彷彿在我的懷內銷沈；

這時的瓦斯像是月輪將落，

懷裏，房裏，宇宙裏，陰沉，陰沉……

ところが、五〇年代以降の選集及び全集ではこの八

行が以下の四行に大きく改変されている。

我不能這樣長久地睡死，

這裏不能長久埋葬著我的青春，

我要打開這陰暗的墳墓，

我不能長此忍受著這裏的陰沉。

『詩文自選瑣記』（馮至選集）一九八三年五月）によれば、「とりわけ詩の終結部があまりに悲観的あるいは希望がなくなかかっていると、かつての暗澹たる情緒が今日の読者に感染してほしくなかったため改変を行った」とある。

(4) 初版には執筆年が「一九二七冬」とあり、その後の選集の末記には「一九二八・一・一〜三」と具体的な日付が記されている。「著作年表」及び「自伝」には一九二八年新年休暇の作とある。

(5) パラテキストについては以下を参照。土田知則他『現代文学理論 テキスト・読み・世界』（新曜社、一九九六年一月）「IV テキスト理論の諸相」第一九五頁〜一九七頁。グレアム・アレン著／森田孟訳『文学・文化研究の新展開——「間テキスト性」——』（研究社、二〇〇二年一〇月）第三章「構造主義の接近法——ジュネツトとリファテール」第一二五頁〜一三〇頁。

(6) 「北遊」が書かれた一九二八年一月以降に、馮至は未名叢刊の『小約翰』を読み、翌一九二九年八月に詩集『北遊及其他』を刊行するまでの間に、その一節を「北遊」のエピグラフとして附け加えたと思われる。

(7) 『語絲』第一三七期（一九二七・六・二六）掲載。

(8) 「楽遊園歌」（天保一〇、杜甫四〇歳の作）。因みに、馮至の『杜甫伝』（一九五二年）は採らない。

(9) 『杜詩詳註』（清・仇兆鰲）によれば、宋・趙次公は「以蒼茫為荒寂貌」とし、『杜臆』は「蒼茫詠詩、乃勃然



得意処」とする。仇氏は「今按…上文語涉悲涼、末作  
発興語、方見後勁」としていることから、後者の説を  
とっている。

\*本稿は二〇一〇年一〇月二四日―二六日に中国北京で開催  
された、中央民族大学文学院主催の国際学術シンポジウム  
「現代伝媒与中国现当代文学」に提出した中文发言稿「現  
代詩文本与媒介物」（『駒澤大学総合教育研究部紀要』第五  
号、二〇一一年三月）をもとに、加筆修正したものであ  
る。